

続・アイルランド人軍医の見た日本

—英領インド、マラヤからの手紙

小村 志保

昨年度の『学習院女子大学紀要』第23号において、第二次世界大戦時にイギリス陸軍に入隊したアイルランド出身の医師フランク・マレー (Francis Joseph Murray, 1912-1993) 氏の残した日記の一部を翻訳、掲載した。マレー氏は1942年2月のシンガポール陥落後日本軍の戦争捕虜となり、シンガポールと北海道で約3年半の捕虜生活を送った。昨年度の紀要では、この捕虜として過ごした期間に書かれた日記を主に扱った。それは戦時中の日本国内の様子や捕虜収容所の実情をよく伝えるものであり、貴重な歴史的史料でもあった。今年度もご子息のカール・マレー氏の承諾のもとマレー氏の残した日記の翻訳を掲載する¹が、今回は捕虜となる前の時期に書かれた日記を取り上げる。期間はイギリス陸軍に入隊する1939年から、英領インド、英領マラヤでの駐留を経て1941年末の太平洋戦争開戦までが中心となる。当時のアジア駐留イギリス軍や植民地の実相を知る手がかりになればと思う。太平洋戦争開戦といえば真珠湾攻撃の印象が強いが、日本軍は同日にマレー半島にも上陸し侵攻を始めている。マレー氏はこの攻撃を受ける側にいた。本稿では日本についての記述は多くはないが、昨年度とのつながりをわかりやすくするために表題は昨年度と同じとした。また英領マラヤ (Malaya) は日本語ではマレーと表記されることもあるが、人名のマレーと同じ表記となるため本稿ではマラヤを使用する。

1. マレー氏略歴

フランク・マレー氏の略歴は昨年度号にも掲載したので本稿では簡単に振り返る。マレー氏はアイルランドが南北に分轄される前の1912年、北部ベルファストで生まれた。ベルファストは現在の北アイルランド地域の首都である。地元の公立学校で教育を受けた後、ベルファストにあるクイーンズ大学 (Queen's University) の医学部に入学、卒業後医師になった。ベルファストとイングランドのバーミンガムで医師として働いていたが、1939年9月にヨーロッパで第二次世界大戦が始まると、マレー氏はイギリス軍に入隊を希望した。医師だったため正規軍ではなく陸軍医療部隊に将校として入隊するこ

¹ My deepest gratitude to Carl Murray.

とを勧められ、1939年12月に中尉として医療部隊に入隊した。1940年2月に英領インド、翌年には英領マラヤに駐留した。1941年12月の日本軍によるマレー半島攻撃を受け、翌月にはシンガポールへ転戦する。この時には移動救急隊の司令官となっていた。翌2月シンガポールのイギリス軍は日本軍に降伏し、この時多数のイギリス軍兵士が日本軍の捕虜となった。マレー氏もその一人となったのだが、この後の捕虜生活については昨年号で取り上げた。

マレー氏は入隊以降詳細な記録を残しているが、これらのほとんどは婚約者のアイリーン・オケイン (Eileen O'Kane) に宛てた手紙の形式をとっている。これも昨年号で触れたが、同い年の二人が出会ったのは1929年、16歳の時だった。夏休みの間アイルランド(ゲール)語を学ぶために通っていたゲール語学校での出会いだった。二人はその後クイーンズ大学に通い、卒業後マレー氏は医師、アイリーンは教師となった。しばらく交際が途絶えたが、1941年7月に婚約している。今回取り上げるインド、マラヤからの手紙もアイリーンに宛てたもので、二人が結婚したのは終戦後の1946年2月だった。

2. 入隊の背景

アイルランドは人口の大多数がカトリック教徒である。しかし12世紀以降イギリスの支配を受け、宗教改革後の17～18世紀に政策として行われたイングランド、スコットランドからのプロテスタント教徒の入植の結果、北部ではプロテスタント教徒の人口比率が他の地域に比べて高くなった。1922年にアイルランドが事実上イギリスから独立した際、北部がイギリスの一部として残留することになったのはこれが理由である。

二度の世界大戦時のアイルランドについて考える時、大まかに言ってイギリスの戦争に協力するのはプロテスタント教徒の場合が多く、カトリック教徒が入隊することは特に二次大戦時にはあまり一般的ではなかった。これは先述したようにアイルランドに住むプロテスタント教徒はイングランドやスコットランドからの入植者の子孫であるため、いわば「母国」であるイギリスの戦争に協力するのは自然な行為である一方、カトリック教徒の場合、長年の圧政者であるイギリスの戦争に協力することは裏切り行為、イギリスびいき、と受け止められる恐れがある。そのためもあって二度の大戦でイギリス軍の一員として戦った兵士たちは、戦後その経験をあまり公にはしなかった。世界大戦の戦死者の追悼行事にアイルランドの首脳が参加するようになったのは最近のことだが、これはカトリック教徒とプロテスタント教徒との間で起きた北アイルランド紛争が平和条約の締結をもって一応の解決を見た結果可能となったものである²。

したがってカトリック教徒で「ナショナリスト」(自身のアイデンティティーがイギ

² ベルファストで開催された第一次世界大戦の戦死者を慰霊する式典にアイルランド共和国の首相が初めて公式に参加したのは2012年11月だった。またアイルランド共和国の議会で第二次大戦時にイギリス軍に入隊したアイルランド人に対して初めて謝意が示されたのは2013年5月のことである。

リス人ではなくアイルランド人である人) だったマレー氏がなぜイギリス軍の入隊を希望したのかは興味深い問いである。インドに出発する直前、父親に挨拶をするためベルファストに帰郷した際、「父は私がなぜ入隊したのかまったく理解できなかった」³そうだが、これはもっともな反応だろう。以下にマレー氏の日記の翻訳を掲載し、この問いを含めて様々な興味深い問題について考えてみたい。

3. 1939年12月～1941年4月

イギリスのバーミンガムで医師として働いていたマレー氏は1939年12月、イギリス陸軍医療部隊に中尉として入隊し、バーミンガムを離れてロンドン郊外のクルッカム基地 (Crookham Camp) で軍隊での生活を始めた。陸軍医療部隊は平時か戦時かにかかわらず、兵士とその家族、また駐留する地域の一般住民に対して医療を提供する部隊である。入隊直後の日記には、同じ部隊で多くのアイルランド人に出会ったことなどが記されている。

奇妙なことに僕の戦友はエジプト人だと判明した。彼はバーミンガムで開業していた。医療部隊に入る医師のうちイングランド人はとても少ないと気が付いた！多くのクイーンズ大学卒業生に会ったし、それに多くのアイルランド人にも！

南部アイルランドは第二次大戦中、中立を宣言して国としては戦争にかかわらなかった。その一方で様々な形で戦争に参加した個人が多くいたことがこの記述からもわかる。第一次大戦の戦死者を戦後長らく公式に追悼しなかったのは、戦争当時アイルランドがイギリスから独立を指しているさなかでありながら、イギリスの戦争に協力したことへの反目があったためだが、二次大戦の場合は国家としては中立宣言をしていたことが大きな理由だ。

1940年1月9日サウサンプトンからインドに向けて出港し、船上でも「リバプールのアイルランド人」や「集団の中で一番騒々しいベルファスト出身の極度に粗暴なアイルランド人」に出会っている。空軍、海軍の人員も乗り込んだ輸送船エトリック (Ettrick) の船内は明るい雰囲気だったようだ。エトリックは1942年11月ドイツの潜水艦の攻撃を受け沈没している。

あの頃は誰も戦争のことを心配していなかった。すべて現実味がなく遠く離れたものだった。戦争は少しも僕を悩ませず、すべてはまったくの冒険だった。それに僕はただの医者だもの！

³ Frank Murray, 'My Army Career As A Medical Officer, December 1939-April 1941', <https://www.thebelfastdoctor.info/journal> (最終閲覧日2021年11月23日、以下引用はすべてこのサイトから)

ひとくちにイギリス軍と言っても、それは様々な人種や宗教的背景を持った者の集まりだった。そのことがよく表れた記述がある。割り当てられた3人用の寝室での出来事である。

一人はイングランド人、もう一人はスコットランド人だったにもかかわらず、僕は彼らと仲良くやった。彼らのうち一人がエジプト人の肌の色について文句を言い出した。無礼にもそれを口に出して言ったのだ。それから彼は宗教について議論を始め、僕を怒らせようと必死だった。しかし彼は成功しなかった。しばしば彼は夜に酒を飲みすぎ、そうすると特に攻撃的だった。ある夜僕は彼に教訓を教えるやろうと決めた。彼はずっと僕個人に対してとても攻撃的で無礼だった。僕は彼を脇に抱えてもみ合いながら通路まで体ごと運んだ。そこで彼を床に押し付けてしばらくの間気管を押さえてやった！彼の頭を数回床にたたきつけて、しっかりと落ち着いた声で説明してやった。これからはこれに懲りて良い子にしている、と。集まって見ていた仲間たちも大声で賛同した。彼はそれから良い子になって二度と失礼なことを言わなかった。人に対して腕力を使ったのはこれが初めてで、おそらくこれが最後になるだろう。

船はマルタ、エジプト、アデン湾を経て英領インドのボンベイ（Bombay、現ムンバイ）に到着する。船上でイングランドのイプスウィッチとセイロン（現スリランカ）出身の海軍士官候補生3人と親しくなるが、「こんなに若い青年がこのような戦争に巻き込まれなければならないとはとんでもない悲劇のように思えた」と記している。ボンベイに到着する前夜にはパーティーがあり、「特にアイルランド人がグラスを割ったり家具を投げたりしていた」。どの基地に配属されるかは「帽子の中から名前をくじで引いて」決定され、マレー氏はラワルピンディ（Rawalpindi、現パキスタン）への配属が決まった。

ボンベイで上陸したマレー氏は当時のこの地の様子を書き残している。昨年号に掲載した通り、北海道での捕虜時代に書いた日記は戦時中の日本社会を的確にとらえていた。同様にここでもマレー氏の鋭い観察力が発揮されている。

この都市は人であふれているように見える。すべての通りで奇形や障害のある子供たちを見かけた。一步進むごとに物乞いや押し売りが物を押し付けてきた。タンガ（訳注：インドの軽2輪馬車）は通りを猛スピードで走っていく。タンガをひくポニーはなんてやせ細ってみすぼらしく貧相なことか。通りはまったく様々な人間の集まりだ。堂々としたカーストの高い女性たちは優美な顔立ちで、見事な色のサリーを身にまとい、手首には高価な宝石、長いダイヤモンドのイヤリングを着けている。男性や女性が額、鼻の横、頬に着けている赤か緑の石が彼らのカーストを示してい

る。西洋風の服を着ているインド人たちもいる。バスや路面電車が大通りを駆け抜ける。タンガや車の事故が起こっても、跳ね飛ばされたのが貧しい女性なら誰も気にしないようだった。

ボンベイでは映画を見て食事をし、観光にも出かけた。

タンガに乗って観光をした。もちろん街の立ち入り禁止区域にも入った。通りは狭く多くのインド人たちが道路も歩道も埋め尽くしていた。インド国旗がそこら中に掲げられている(緑、白、黄色!)。この辺りは実際には市場なのだ。店は路面に広がっていて商品は歩道のあちこちに置かれている。この群衆が僕たちを軽蔑したようなまなざしで見ると、僕には彼らの気分を感じ取ることができた。僕は彼らが好きだ、なぜなら僕は彼らと共通点が多いからだ・・・もっともおもしろかったのはパルシー民族の寺院だ。ここでは死者は埋葬されない。野ざらしにしておいて、それをハゲワシが骨にするんだ!パルシー民族は裕福な商人階層だ。商売に成功していて、インドの他の階層に比べてとてもヨーロッパ的だ。

緑、黄、白の3色から成るインド国旗はイギリスからの独立を目指すインド国民会議によって1930年代頃から使用されていたもので、緑はイスラム教徒、黄色はヒンズー教徒、白にはこれら二つの宗教の共存、の意味が込められていた。アイルランド国旗も似たような経緯と意味を持っている。現在のアイルランド共和国の国旗に使われている緑、オレンジ、白はそれぞれ、カトリック教徒、プロテスタント教徒、両者の和解、という意味が込められている。この3色がアイルランドで使われるようになったのはイギリスからの自治・独立を求めて起こった1848年の反乱の頃からだ。インドの人々の「軽蔑したようなまなざし」はおそらくイギリス、イギリス人、イギリス軍人に向けられたものだろう。そのまなざしを受けながらイギリス軍に属していたとはいえ、アイルランド人であるマレー氏は「彼らとは共通点が多い」と感じていた。独立後のアイルランド共和国で首相となるイーモン・デヴァレラ (Eamon De Valera, 1882-1975) は1919年に渡米し、独立戦争を戦っていたアイルランドへの支援を募っている。この際インドの独立運動家らと面会し「インドの愛国者たちよ、あなた方の大義は我々の大義と同じだ」と呼びかける冊子を出版している⁴。英領インドはインドとパキスタンに分離して独立するが、これはやはり宗教の違いを基にして分轄されたアイルランドを思い起こさせるものである⁵。インド、パキスタンの独立時、最後のインド総督だったのはマウン

⁴ Eamon De Valera, *India and Ireland*, (Friends of Freedom for India, New York, 1920)

⁵ Deirdre McMahon, 'The 1947 Partition of India: Irish Parallels', *History Ireland*, Vol.18, No.4 (July/August 2010), pp.40-3.

トバッテン卿 (Louis Mountbatten, 1900-1979) だが、北アイルランド紛争が激化していた1979年、南北アイルランドの統一を求める武装組織IRAによって殺害された。

マレー氏はインド上陸後、列車でデリー、ニューデリー、ラホールを経て2月初めに任務地のラワルピンディに到着する。この地でも何人かのアイルランド人に出会った。北部駐留軍司令部 (Northern Command) の中佐と女性看護師長はアイルランド人だったと記録している。ここで陸軍病院に勤務するが「軍服を着るのは毎日午後1時までと決められており、木、土、日曜は平服を着る規定」だった。ここでの「仕事」は「ばかげていた」。「朝9時に病院に着き・・・病棟を回診。数枚の書類や紙に署名して朝11時には仕事が終わる。熱くて甘いお茶で正午まで時間をつぶす。それから昼食前に一杯やるために宿舎に戻る」という日々だった。陸軍看護軍団 (Queen Alexandra's Imperial Military Nursing Service) 所属の看護師や将校たちは「文字通り何もしなかった・・・そのほとんどは夫を見つけに来ていた。数人は看護に関心を持っていたが、患者である兵士や自身の仕事に本当に興味を持っていた人は珍しかった。彼女たちは皆酒を飲み踊って愛敬を振りまいていた」とも記録している。

アイルランドの北部アルスター地域で編成されるアルスター・ライフル連隊 (Royal Ulster Rifles) もラワルピンディに駐留しており、「彼らのベルファスト訛りを聞くのはうれしかった」。そこには「パイプの生産で有名なダンヒル家の息子」も所属しており、「かわいそうなことに」ここではただの「一兵卒」だった。アイルランドの祝日である聖パトリックの日は「シャムロックなしでやってきたが、アルスター連隊では楽しい一日を過ごした」。

この年のイースターには「さんざん苦労したあげく、神父に連絡がつき、彼は僕の告解と聖体拝領のためにやって来てくれた。このことはイースターの日曜日に大きな喜びをもたらしてくれた」。このように神父を探し出して宗教的儀式を受けることは、日本で捕虜生活を終えることになる1945年までマレー氏が貫いた行動であった。この年の4月から10月まではカイラ・ガリ (Khaira Gali, 現パキスタン) で砲兵隊の医務官となった。「マリー (Murree) の丘を越えて標高8000メートル」にあるその駐屯地での仕事の「申し出に僕は飛びついた」。そこは「本当の意味で人里離れた村だった。数人のインド人が挨拶をしてきたが、すべての建物は閉ざされており、白人はどこにも見当たらなかった。地面にはまだ雪が残っていた」。宿舎からは「雪をかぶって恐ろしいほど壮観なヒマラヤ山脈」が見え、170マイル向こうにはナンガ・パルパット (Nanga Parbat) が見えた。軍関連施設以外はほとんど何もない土地だったが「何人かのカトリック教徒が1860年に埋葬されたという美しく小さな墓地」を見つけ、この場所は「いつ訪れても心に平穏を与えてくれた」。この基地では兵士や将校たちが家族を伴ってきており、「インドの高原地帯のありふれた他の基地と変わらなかった。同じようなスキャンダルが男たちと人妻たち (夫たちは平原地帯にいる!) の間で起こっていた」。

ある日周辺を散歩していて「マーフィー神父と彼の教会を見つけた。この教会はインドのアイルランド連隊が建てたものだ」。マレー氏はこの基地にいる間マーフィー神父の礼拝を受けた。この頃知り合った医療部隊の副司令官代理は、1942年2月のシンガポール陥落の際、日本軍に撃たれて死亡した、と記録されている。この地では砲兵隊とその家族への医療提供が主な任務だったが、ここでも多くのアイルランド人に出会った。またこの地域での衛生検査を毎月行うことになっていたが、それは「すごく楽しかった。市場の喫茶店はいつもひどく不潔だったので、店主に清潔にさせようと追いかけてまわして大変な思いをした」。また軍の診療所には「地元のインド人がたくさん治療を受けに来て、彼らにはいつでも僕のできる最善を尽くした」。目の病気を患っていた「若い女性が父親に連れられてやってきたが、それはイスラム教徒としてはとても珍しいことだった。女性たちは常にベールをかぶっていた。僕はなんとか治療して彼女の視力を守った。彼らはとても感謝していた」。この診療所では地元の人8人を使用人として雇っていた。

アボッタバード（Abbottabad、現パキスタン）でも短期間医務官として働いた。ここにいた連隊は山岳地帯での戦闘訓練を行っており、マレー氏の仕事量は増加した。「兵士たちは健康状態が悪く多くが病にかかっていた。それに仮病も多かった！」と記録している。この地のインド陸軍病院のイギリス病棟の担当者にもなった。彼らは「アボッタバードに初めて駐留するイギリス軍部隊」で、ここは「グルカ兵とシーク教徒でいっぱい」だった。他方インド病棟は「これまで見たもっとも衝撃的な混乱」状態にあり「すべてが混乱していた。まともな看護兵がおらず、十分な注意が払われていない。すべてが汚かった」。「インド兵たちにこんな医療を提供しているとは！」と嘆いている。ここで見たグルカ兵たちをマレー氏は「世界でもっとも優れた兵士」だと感じた。グルカ兵は主に現在のネパール出身だ。「彼らは小柄で筋肉質、よく鍛えられていて東アジア人の外見、そしていつも陽気だ。サッカーも音楽も得意で多産でもある。各家庭には12人位子供がいるようだ。彼らはイギリス人に指揮されている」。

将校クラブで見た光景についてマレー氏は批判的だ。英領インドにいる期間、マレー氏は家族を伴って駐留していたイギリス軍の上層部に対して一貫して批判的で、自分とは相いれない存在だと感じていた。

若い女性たちはいつものように大胆で男らしく見せようとし、年かきの女性たちは若く見せようと骨を折っている！そして若くてひげも生えていないような白人の男たちは全員、はちみつのまわりを飛ぶ蜂のように女性たちの周囲をブンブン飛び回っている！もっと落ち着いた大佐たちはプールのまわりに座ってビールをすすり、自分たちのスキャンダルについておしゃべりをする。インドのイギリス人たちの生活ときたら何たることだろう。このクラブでは日曜の朝が一週間の山場だ。プー

ルはぎゅうぎゅう詰め。何十人かがその周りに座って酒を飲み、褒めあっている。一日でいいから我が懐かしのアイルランドを返してくれ！

その後バリアン (Barian) の陸軍病院に移る。バリアンは「インド山間部の基地の中でもっとも美しいと評されて」おり、「実際この静かな美しさに匹敵するものを見たことがなかった」。ここの病院には「ほとんど患者がなく」「兵士の診察呼集、病院の回診、家族病棟での診療呼集と回診、その後一時間書類に署名」という毎日だった。病院の敷地内にはイスラム教徒のためのモスクがあり、「朝晩の祈りを聞くのが好きだった。わくわくして聞いていた」。夜警や乳母などとして様々な民族や宗教の人々がイギリス軍関連施設に雇用されていた。この地の警察官はマレー氏を「イギリス人でボス」と呼んでいた。現地の人々から見れば恐らくイギリス軍に属する白人は皆「イギリス人」ただだろう。アイルランド人の置かれた矛盾する立場を物語る場面だ。この地にはマーフィー神父がやって来てミサを開いた。ある家族の子供の洗礼式も行われ、その母親はベルファスト出身だった。

1940年10月ラワルピンディの基地に戻ったマレー氏は病院の仕事に加えて食糧調達係にもなり、この後数か月間多忙な日々を送った。交際の途絶えていたアイリーンとはこの地からクリスマス・カードを送ったことをきっかけに交流が再開し、手紙のやり取りの後、翌年7月に婚約している。

ここでは将校やその家族たちによる「カクテル・パーティー」が頻繁に開かれていた。1940年の大みそか、マレー氏をパーティーに招いたのは、日本で良く知られているアーサー・パーシヴァル (Arthur Percival, 1887-1966) 夫妻だった。後のシンガポール陥落時、パーシヴァルは日本軍の山下奉文に「イエスカノーか」と迫られた、という話は広く知られている。マレー氏によれば「オーストラリア生まれのパーシヴァル夫人はとても愉快な人だった。年老いたパーシヴァル自身はユーモアのかけらもない人物だった」。これより20年前パーシヴァルは対英独立戦争を戦っていたアイルランドに少佐として赴任しており、南部コークでは所属部隊が拷問など残虐行為を行ったとされ、アイルランドでは「イギリス軍将校のなかでもっとも激しく反アイルランド的」な人物と見られていた。マレー氏はこのことを意識していたのだろうか、日記にはこの点についての記述はない⁶。

1940年12月になると「インド部隊は急拡大している。野戦病院や移動救急隊が国中に設置されている」という記述があり、事態が緊迫していく様子が見えてくる。マレー氏が所属していたのは第9インド歩兵師団で、これは1940年9月に結成されたものだった。「村から出てきたばかりのインド人新兵」で編成され、彼らと「20マイルの行軍」など「厳

⁶ Ernie O'Malley, *The Men Will Talk to Me: West Cork Interviews*, (Mercier Press, 2015); Tom Farrell, 'An Irishman's Diary', *The Irish Times* (Feb. 15, 1997)

しい訓練」を行った。英印軍とも呼ばれるこのインド師団の兵士は「インドのカーストのすべて」から成っており、「イスラム教徒、ヒンズー教徒、シーク教徒、ドクラ人、パターン人、グルカ兵、ネパール人、キリスト教徒、イングランド人、アングロ・インド人、マラータ人、タミル人」がいた。そのため「いくつもの炊事場が必要だった。ひとつのカーストにひとつずつ」という状況だった。この年の秋には新たに女性看護師団が派遣されてきたが、このうちの一人がアイルランド人だったと記録されている。彼女はその後シンガポールから避難する際に船が攻撃されて死亡したとのことである。

「戦争からは遠く離れており、人々は戦争などまるで起こっていないようにふるまっていた」という日々から、マレー氏は1941年2月頃「突然引き離された」。第9インド歩兵師団第27インド移動救急隊に配属されたためだ。「寒い夜を何度も野営で過ごし」、行軍、厳しい訓練、リボルバーの発射訓練も経験した。第27移動救急隊には「多くのインド人医師」がおり、「日中の熱いさなか田舎道を行軍」して「インドの本当の貧困を見た。彼らには水がほとんどなく、教育はまったく受けておらず、衛生状態がひどくてこれが多くの病気の原因だった」。第27救急隊は4月には「戦争に行く準備ができ」ラウルピンディを列車で去ったが「行き先がどこなのかまったく知らなかった」。3日後に着いたのはインド中南部の都市ハイデラバード (Hyderabad) だった。「野営や特に行軍の時にはとにかく暑かった」がある日の昼食は思い出深いものになった。

ハイデラバード市にある宮殿で、ハイデラバードのニザーム (Nizam of Hyderabad、訳注：ニザーム藩王国の王) から昼食の招待を受けた。世界一金持ちの男だ。彼は年老いてしわだらけで、僕にはとても不幸な人に見えた。悪名高い守銭奴でひどい服装をしていて月30ルピーで暮らしていた。体中に金や貴重な宝石を着けていた。彼の臣民たちは悲惨なほど貧しい。彼の家族といたらすごい。80人の子供がいて、嫡出子と非嫡出子がいる。嫡出子は黄色いターバンをトルコ帽の形にしてかぶり、非嫡出子はピンク色をかぶる。ニザームは高齢で派手なことを嫌い、めったに外に出ない・・・嫡出の長兄二人は彼らの人生の最初の20年間を宮殿に閉じ込められ過ごす、教育は受けず乏しい食べ物で。総督が介入して彼らは適切な教育と毎週の小遣いを与えられ、旅行も許可されることになった。彼らの一人はトルコの王女と結婚し、しばしば人をもてなし、国家の行事をこなしている。しかし出費には監視の目が注がれている。ニザームは年に何度か親族から金を徴収する。長男は魅力的な人物だと思った。

英領インドはイギリス直轄領と藩王国から成っており、ハイデラバードは藩王国のひとつだった。インドがイギリスから独立した後、ハイデラバード藩王国は1948年にインドに併合されて消滅した。マレー氏らを昼食に招いたのは最後の藩王となったウスマーン・アリー・ハーン (Osman Ali Khan, 1886-1967) だと考えられる。

4. 1941年2月～1942年1月

1941年2月に第27救急隊に配属された頃、個人的な生活にも大きな変化が起きた。前年12月に送ったクリスマス・カードの返信として後に妻となるアイリーンからインドのマレー氏に手紙が届いたのだ。アイリーンから手紙が届くのはこれが初めてで、しばらく途絶えていた交流がこれにより再開した。これ以降マレー氏はアイリーンへの手紙の形式で詳細な日記をつけ始める。5月末頃からは毎日欠かさず「僕の手紙をある種の日記のようにして」書き始め、これは北海道での捕虜生活を終え帰国の途に就く1945年9月まで続いた。

アイリーンへの手紙には素直な心情が吐露されている⁷。「戦争が始まって僕はすぐに入隊した。それが僕の使命だと知っていたから・・・フランスに行きたかったけど、代わりにインドにやって来た」。「インドでは僕は幸せではなかった・・・インドの基地でのヨーロッパ人の生活はひどく人工的だ。人々はわざとらしく不誠実。妙なビクトリア期の慣習も残っており・・・そしていつまでも続くドリンク・パーティー」といった生活で「僕がそういう場面が得意でないことは君も知っているだろう」。「インドでできた本当の友人は3人だけ」でこれはカトリック教徒の一家だったそうだ。ニザームに面会したハイデラバードは以下のように伝えている。

建物の豪華さがどんなものか君には想像もできないほどだ。悲しいことに金持ちはとて金持ちだが貧者は極度に貧しい。それでも人々は幸せで満足しているように見える・・・北部よりもこの地にはカトリック教徒がずっと多い。これは聖フランスコ・ザビエルのせいかもしれない。また人々の性質も理由かもしれない。この土地の習慣は美しい・・・昨日僕が教会で見た光景を君が見たら驚くだろう。信徒の中で白人は僕だけだった！神父も侍者も修道女も皆現地の人だ。教会には椅子がなく人々は皆床の上の敷布に座るんだ・・・礼拝はこれまで見たものでもっともすばらしかった。

4月からは英領マラヤに駐留する。ペナン (Penang) を経てイポー (Ipoh) に到着した。マラヤからの手紙は軍事機密扱いとなり、自身の所属部隊や居場所を記すことはできなかった。マラヤからは一週間分の日記をまとめて週に一度アイリーンへの手紙としてアイルランドへ送っていた。5月1日の日記には入隊した理由がわかるような内容が記されている。ベルファストがドイツ軍による空襲を受けた後に書かれたものだ。

ベルファストに爆弾が降って何百もの人々を殺しているなんて想像ができない。身

⁷ Frank Murray, 'Letters From India and Malaya, February 1941-January 1942', <https://www.thebelfastdoctor.info/letters-to-eileen> (最終閲覧日2021年11月23日、これ以降の引用はすべてこのサイトから)

を守ることができない人々を。愛するアイリーン、僕がそういう残酷さや残虐行為に立ち向かって戦いたくなる気持ちを理解してくれるかい？ドイツの飛行士が故郷の僕の大切な人たちと、君にとって大切な人たち皆を殺しているかもしれないと思うと気が狂いそうだ。

アイルランドのカトリック教徒が第二次世界大戦時にイギリス軍に入隊することはどちらかと言えば珍しいことであったことは先に述べた。入隊には個々人の事情があったことは間違いないのだが、一般的に主な理由としてあげられるのは「家族の伝統、冒険心、就職の機会としての入隊」だ。これらに加えて当時のアイルランドでは「イギリス軍に入隊すればアイルランドを守ることができる」という考え方もあったようだ。「イギリスが負ければヒトラーがアイルランドを放っておくはずがない、イギリス領はアイルランド北部にもあるのだから」と考えて入隊した人も少なからずいたとされる⁸。マレー氏の場合はこれに当てはまると考えてよいのではないか。「フランスに行きたかった」というのもこれが理由だろう。またインドやマラヤでの記録を読むと、いくらかの冒険心もあったように思われる。

イポーでの駐留が始まってマレー氏はこの地のカトリック教会に通い始めた。この地の「人口のほとんどは中国人」で、教会の神父は「フランソワ神父」というフランス人だった。この「長く流れるような白いひげ」を持つ神父は「聖人のよう」で「中国人の信者たちは彼を崇拜しているようだった」。5月にはマラヤを訪れていた中国軍の将軍たちと夕食を共にした。「彼らは立派な人々で日本は最終的には負けるだろうと確信した。中国軍はとても組織立っている」との感想を持った。食事の際には「箸を完璧に使えるという眠っていた才能にも気が付いた」。同じころペラク (Perak) のスルタンにガーデン・パーティーに招かれて「大いに楽しんだ」こともあった。

熱心に教会に通い「愛する人のために一生懸命祈りを捧げる」日々を送っていたこの時期、ある日曜のミサでアイルランド西部のメイヨー州 (Mayo) 出身のウィムゼイ (Wimsey) 医師とその妻子と知り合う。「アイルランドの顔となまりを持つ」ウィムゼイ氏はこの地の病院で医師として15年働いていた。「彼はここで政府関係の良い仕事に就いていた」。この人物もイギリス植民地でアイルランド出身の人々が様々な役割を果たしていた良い例だろう。先述したようにイギリスからの独立を長く求め、戦争の末南部の独立を得たアイルランドにとって、イギリスの繁栄のために働き、大英帝国の拡大や維持に協力するアイルランド人は必ずしも理想的なアイルランド人像ではない。彼らの足跡はしばしば「歓迎されない遺産」「不都合な事実」と呼ばれるが、これもまたア

⁸ Steven O'Connor, 'Why did they fight for Britain? Irish recruits to the British forces, 1939-45', *Études irlandaises*, 40-1(2015), pp.59-70.

イルランドの現実だった⁹。駐屯地から10マイル程離れた場所に住んでいた一家に夕食に招かれた時の様子は以下のようなものだった。

僕にはマラヤに友人がいないことを知っているからとにかく優しくしてくれる。いつものようにアイルランド問題について議論をした。僕らの思い通りになっていたらずっと前に解決していただろう！そういえばある夜にクイーンズ大学の卒業生に会った。彼は名をリード (Reid) といい法学部だった。僕はすぐに彼だと気付いた。彼は学生時代目立つ存在だった・・・長身で細身、濃い黒髪、彼はアイルランドを南北に分轄するべきではないと考えている本当に数少ない非カトリック教徒の一人だ・・・彼はもうすぐ空軍に入隊する。ブラッドリー・マッコール (Bradley McCall) はマラヤのある大きな町の首席検察官になった！アイルランド人はマラヤのあらゆることのリーダーになっているみたいだ！

1941年5月24日の手紙には「日記を手紙にして」送ろうと決めた理由が記されている。「手紙のやりとりが完全に途絶える日がやがて来るかもしれない。そうなる前に君に伝えたいことがたくさんあるから1行か2行でも毎日書かなければ。ヒトラーでも僕が君を愛することを止められはしない」。実際この日以降4年以上にわたって毎日欠かさずアイリーン宛ての日記を書き続けた。

第27救急隊で指揮権第2位の少佐代理であったマレー氏は約40人のインド人兵士を指揮する立場にあった。この部隊ではマレー氏と上官の司令官だけがヨーロッパ人、つまり白人だったが、英印軍ではこれは典型的な編制のひとつだった。訓練で指揮を執る他にも、物品の支給や給与の支払いなど日々様々な任務があった。インド兵とは良好な関係を築いていた様子が頻繁に記録されている。「インド兵を執事として使用するのは拒否している」との記述もある。その理由は「インド人は僕らキリスト教徒をととても低いカーストと見ていて僕らのためにはまったく働きたがらないからだ」と記してあるが、アイルランド人としての感情もあったのかもしれない。ある日の夜間訓練は次のように記されている。

午後6時半から11時半まで夜間訓練をした。ジャングル、沼地、農園を行軍した5時間ずっと雨が土砂降りだった。でもそれは素晴らしかった。僕は雨が大好きで雨が顔から首に伝わっていく感触が好きだ・・・暗闇の中、森にいるのはおもしろかった。たくさんの動物が出す妙な音、木々には蛍がいっぱいで、時には豆電球に照ら

⁹ Hiram Morgan, 'Empire-Building an Uncomfortable Irish Heritage', *The Linen Hall Review*, Vol.10, No.2 (Autumn, 1993), pp. 8-11; Keith Jeffery, ed., *'An Irish Empire'? Aspects of Ireland and the British Empire* (Manchester University Press, 1996); Kevin Kenny, ed., *Ireland and the British Empire* (Oxford University Press, 2004)

されたクリスマス・ツリーのように見えた・・・僕はすごい発見をした。4マイル離れた場所に美しい湖があったのだ。そこで一日の仕事が終わって日が暮れた時・・・車を出して十何人かを乗せて泳ぎに出かけた。彼らは泳ぎを楽しんだし、僕も楽しんだ。イギリス軍ではインド人兵士と一緒に泳ぎに出かけるのはあまり普通ではないのだけど、僕はいつも普通ではないことをしてしまうだろうね。結局のところ彼らも人間なのだし、太陽の下でひどく暑い一日を過ごした後、彼らを泳ぎに連れて行かない理由はない。彼らのほとんどは泳ぎが上手だ。子供の頃から彼らが愛するガンジス川で泳いでいるのだから。

6月初めにはマラヤ北部でタイとの国境地帯にあるケロー（Keroh/Kroh、現マレーシア）の基地に移動が決まった。移動の前にウィムゼイ家でお別れの食事が開かれる。

この素晴らしい一家のもとを去ることになったが、僕は彼らを決して忘れないだろう。イングランド人もスコットランド人も悪くないけどね、アイリーン、この広い世界でアイルランド人に勝る民族はいないよ。どんな場所へ行こうとも自分がアイルランド人だと誇りを持って宣言する。そしてアイリーン、君がアイルランド人であり、良きカトリック教徒であることをいつでも誇りに思うだろう。

1939年から45年までの間にマレー氏は膨大な量の日記や手紙を残しているが、その中には一か所も国家としてのイギリスやイギリス軍のために戦う、というような記述は見当たらない。

将校であるマレー氏はイポーではホテル住まいだったが、ケローでは「一部屋しかない木造の小屋」が住居となり「屋根は椰子の木」でできていた。「一番近い教会まで50マイル」あるこの地でもアイルランド出身の大佐や少佐に出会っている。兵士のための食糧などを調達する任務も負っていたため時折地元の村に出かけていたマレー氏は、この地の「商店主はほとんどが中国人で何人かはピジン英語を話す」と記録している。この時期は「マラヤはまったく戦争状態にない」と記されているが、第27救急隊は負傷者の搬送訓練等を行っていた。この頃から「自分を実戦部隊にいる」という記述が繰り返し現れる。

兵たちは丘を行ったり来たりして「負傷者」を運ぶのは大変だっただろう・・・彼らには時々十分な休息とタバコを与えた。彼らは眼下に広がるのどかな景色をじっと座って見ている。インド人たちは丘の上に何時間でも座って谷底を眺めている、筋肉をひとつも動かさずに。インドの高原地帯の基地で働いていた頃、彼らの頑強な顔を観察したものだが、彼らが何を考えているのかを推測することは決してでき

なかった・・・僕は彼ら全員にインドにいる家族への手紙をしばしば書かせている。なぜなら彼らの母親や妻たちが彼らをどんなに心配しているかわかっているからだ。彼ら全員が給料の9割を親族やその他の人のために故郷に送っているのを知っている。彼らのうちの何人かはとても愛すべき性格だ。多くはインドの村々出身の素朴で学のない若者だ。何人か大学に入学した知的な青年たちもいる。

この場所では「自分が恐らく唯一のカトリック教徒」だったため、カトリック教会はなく、神父もいなかった。「部隊や地域に十分なカトリック教徒が集まれば神父がミサのためにやって来てくれるかもしれない」と知らされていた。この時期の日記には入隊の理由と考えられるような内容が再び現れる。それは「ドイツがロシアに宣戦布告した」という知らせを聞いた時の記述である。

これはヒトラーと世界の支配者になろうとする彼の狂った野望の終わりの始まりだ・・・これで更に何百万人かの人々が苦しむことになる。時々避けられないものではあるけれど戦争はひどいものだ。バーミンガムには大切な友人がいた。彼はヒトラーの秘密警察から逃れてきた避難民だった。ドイツが侵攻してきた時彼はウィーン的神父だった。彼は生き延びるためにスイス、そしてイングランドに逃げてきた。彼はドルーフスの親しい友人でカトリックの教えに基づいて理想的な憲法をドルーフスが作成するのを助けた。彼はイングランドに着いてすぐ僕の患者になった。完全に神経衰弱で眠ることも、集中することもできなかった。彼はオーストリアの知識人であるというのに。彼を治療し、彼が少しずつ回復していくのを見ることができて誇りに思っている・・・彼の名はメスナー神父。彼は母親をチロルに残してきたことを悲しんでいた。彼は本当の意味の亡命者で本人もそう感じていた。彼は国家より前に教会があるべきだ、と説いただけだ。そのためにヒトラーから逃れなければならなくなった。この小柄な彼と彼の大義のためなら僕は世界中のナチと戦うつもりだ・・・彼のため、彼の大義のためなら戦うに十分な価値がある。

このウィーン的神父とはヨハネス・メスナー神父(Johannes Messner, 1891-1984)で、オーストリア首相エンゲルベルト・ドルーフス(Englebert Dollfuss, 1892-1934)に助言を与える立場にあった。ドルーフスはナチス党员によって殺害されている。

6月末になって「50マイル離れた町にいるフランス人神父によく連絡が付いた」。「彼は普通この地域を年に三度訪ねてくるが、これからは少なくとも月に一度は訪ねるよう努力すると約束してくれた。良い知らせだ。なぜなら僕は日曜のミサをこれまでの人生で欠かしたことがないから」。ケローでは訓練が続く日々で、7月初頭の日記には、上官とトラックで道を走れば「中国人やマレー人の子供たちが格好良く敬礼をする」よ

うになっていた。また同じ頃「軍の医療部の偉い人」が部隊の視察に来たが「ダブリン出身の人だったので当然仲良くなった」。「彼を通じてコーク出身の医師もこの場所にいると知り、彼は僕のことを知っているらしい」とあり、「世間はますますせまくなってきている。近い将来ジャングルの真ん中でクイーンズ大学の卒業生に出会っても驚ろかないだろう」と記している。

この年の夏の日記には「君に伝えるべき心躍るようなことや興味深いことは何も無い」「こんな場所では何も起きない」と書かれており、日々訓練や雑務に明け暮れている、という様子である。しかし7月5日にはアイリーンとの婚約が決まり、喜びにあふれた内容になっている。

ダーリン、今日は僕の人生においてもっとも幸せな日だ・・・1時間程前に電報を2通受け取った。そのうちのひとつには「答えはイエス」と書いてあった。ダーリン、これが僕が何年も待っていた答えだ。そしてその答えをもらった今、僕がどんなに幸せか君には想像できるだろう。ダーリン、僕らは婚約したのだから、将来の計画をたてなければ、とても不確かな将来の・・・今は戦争中で、僕が故郷へ送り返されない限り、戦争が終わるまで結婚できる望みはない。そんなに待たなくてはならないなんて苦しいけれど仕方がない。僕たちは耐えるしかない。どんな指輪がほしいか教えてほしい、そうすれば何を送ればいいのかわかるから。指輪が届いたらそれを指に着けて僕がいつもそばにいることを覚えていてくれるかい？風変りな婚約だね、ダーリン。僕は手紙でプロポーズをして君は電報で返事するなんて！僕らは8000マイルも離れているけど、このことはまったく障害にならなかった。ダーリン、僕はすぐに本当の戦争に行くかもしれない。そうなったら君には僕からの手紙が届かないだろう。でも約束する。いつでも可能な限り君に手紙を書く。僕が君に手紙を書けなくなるのは死んだ時か重傷を負った時だけだ。だからいつでも覚えておいてほしい、アイリーン、そうなったらベルファストにいる父に連絡を取ってくれ。父は僕の親族だから僕の状態についてすぐに電報を受け取るだろうから。

アイリーンからマレー氏へ送った手紙は、シンガポールで日本軍の捕虜になった際、日本軍に没収されることを恐れてすべて燃やしてしまったとのことである。マレー氏は「マラヤでは一番涼しい基地」ケローでの駐屯に満足していたようだ。

朝は輝かしい。すべてが新鮮で空気は澄んでいる。鳥たちは歌を歌う。夕方も心地よい。聞こえてくるヒンズー教徒の祈り、その音楽は本当にすばらしい。イスラム教徒の指導者は夕暮れになると祈りの合図の音を流す。

ケローは「鳥たちが本当に歌を歌っている、すべてが美しい場所」だった。「いわゆる世間からはかけ離れているが、神の御意志そのままの本当の命にあふれた場所で、人工的なところがひとつもない」と表現している。

7月末になってようやくフランス人神父が基地を訪ねてきた。マラヤに来て12年になるこの神父はブルターニュ地方の出身で「30人程が入ることのできる」「木造の小さな何の飾りもない美しい礼拝堂」に住んでいた。パリにいる修道女である姉妹と、仏独国境のマジノ線（Maginot Line）で捕虜になった兄弟がいるがどちらとも連絡が取れないでいたという。7月23日にはミサの様子が記録されている。

とても早起きして基地内のカトリック教徒全員を集めてトラックで礼拝堂に向かった。地元の信者たちは既に床に座って祈りを大声で捧げていた。それは美しい光景だった。祭壇の手すりの端で告解を聞く神父は聖人のように見えた。実際彼は聖人なのかもしれない。礼拝堂の後ろに2列の座席があり、そこから地元の先導役に案内された。僕たちはこの地区でミサに参加した初めての軍関係者で地元信者たちは大騒ぎをしていた。地元信者というのは南インド出身のタミル人たちでのことで、マレー人や中国人はそこにいなかった。

負傷者の輸送訓練や夜間行軍などの厳しい訓練を続け「少しの修正点を残すのみ」となったこの頃、兵士100人程から成る自分の部隊は「何が来ようとも準備ができています」状態だと記録している。日本軍は1940年に北部仏印、1941年7月には南部仏印に侵攻しており、東南アジア諸国の情勢は緊迫していた。インド人兵士とは良好な関係を保ち続け、しばしばサッカーの試合が行われた。ある日のサッカーの試合ではベルファストから取り寄せた緑色のユニフォームをインド兵たちが熱心に着たがり、「彼らのうち何人がこの色を選んだ僕の気持ちを理解しているのかな」と不思議に思った。

日記に初めてはっきりと日本という言葉が使われるのは1941年7月28日で「危機」が迫っていることがわかる。

君も知っているかもしれないが極東は危機にある。そしてその危機は僕に直接関係がある。これが君への最期の手紙になるかもしれない、アイリーン、そうならないよう願って祈りを捧げている。最後の手紙になるかもしれないなら君は知っておくべきだ、一通も手紙が届かなくても僕は君を変わず愛し続けることを。僕は輝ける騎士ではないけど、怖気づいて自分の任務を放棄するようなことはしないと君に約束できる。君の愛が僕を強くしてくれるから、勇敢であることは簡単だ。移動救急隊の中で一番大きな中隊を指揮しているから多くを期待されている。派手なこと

をするつもりはない。でも臆病者と呼ばれるくらいならむしろ死を選ぶ。最近赤十字は何の役にも立たないけど、日本人ほど赤十字を軽視する民族は他にいない。だから赤十字の旗の下での保護は求めるつもりはない。

7月29日には気に入っていたケローから他の基地への移動が決まり、少佐から大尉への降格も決まって不満と落胆が綴られ、「本当につらいのは」「一人ひとりを好きになった100人の部下を失うこと」だった。結局階級は降格となったものの任務の内容は変わらず、同じ中隊を指揮することにはなったのだが、インド兵への愛着は強かったようだ。「彼らは故郷や愛する人々から遠く離れていて、時々彼らのことを思うと心がひどく痛む、このような場所では彼らが得られるものはあまりないのに」というように心を配っていた様子が多く書かれている。またインド兵たちからの信頼も得ていたようで、「他の将校にはそうしないのに」宿舎の修理などをいつの間にかやってくれることがしばしばあったという。

僕は彼らに甘くしたことはなかった。彼らは働くべき時には働き、遊ぶべき時には遊び、休息が必要な時はそうした。時間に余裕があれば仲間になり、彼らと平等な立場で語り合った。彼らは他の将校にはそうしないのに僕を常に尊敬してくれた。彼らの中でもっともカーストの低い兵士には、他のどんな司令官にするよりもずっと敬意を込めた敬礼を僕は送った。

「30台以上のトラックや救急車両」を率いて「470マイル」も離れた新しい基地への移動が完了したのは8月初めのことだった。機密事項のため手紙では場所が明かされていないが、新しい基地はクアンタン（Kuantan）にあった。「一番近い町から200マイル離れていて、文明から隔絶されている」この場所で「小さな美しいマリア像と聖心の絵」を飾っている新聞店を見つけた。この店の「店主は当然カトリック教徒でこの地でのミサについてあらゆることを教えてくれた」。ここでは「クリスマスまでミサがない」と聞いて失望している。

「多くは言えないが現在の生活は安楽ではない」「極東の情勢はとても緊迫している。しかし今の僕の仕事は戦争だから自分の役割を果たすよう努めるのみ」のように情勢の悪化がうかがえる記述が増えている。マレー氏は「2年間休暇を取っていない」が「東洋勤務の白人は2年ごとに半年の休暇をもらえる」のが通例だとも書かれている。白人たちは「故郷に直行し、そしてこの暑い場所に喜んで帰ってくる。彼らはこの気候に長期間耐えることができない、時々涼しい場所に帰らずには」。またBBC放送のおかげで「マラヤでも毎日ニュースを得て」いた。

訓練が続く日々、部下のインド人兵士を連れての南シナ海での水泳が楽しみだった。

「90パーセントの兵士はそれまで海を見たことがなく、波と砂浜に歓喜していた。海岸での彼らは大勢の幸せな子供たちのようだった。彼らはパンジャブ（Punjab）の故郷に手紙を書いて海の驚異を伝えるだろう。彼らは全員パンジャブ人だ」。8月半ばにはインドの藩王国のひとつパティアラのマハラジャ（Maharajah of Patiala）が基地を訪問した。パティアラはインド北部パンジャブ地方の藩王国でマハラジャは日本語では「大王」と訳されることもある。

彼はインドのシーク教徒の藩王国の首相でシーク教徒は皆彼を「父」と仰いでいる。彼がいよいよ姿を現した時僕は彼の身長に驚いた。約190センチあり、黒いひげでとても美男、体格も良く司令官の制服を着ていた（パティアラ藩王国軍の）。彼は有名なクリケット選手かつアスリートで実際そのように見えた・・・僕が彼について感心したのは彼が司令官ではなく兵士たちに会いに来たということだ。そして彼はシーク教徒の兵士たちにすべての注意を傾けた。彼は椅子に座り父として兵士たちに語りかけ、兵士たちは皆半円状に彼を囲んで足元に座っていた。インドの故郷にいる家族の心配事までも副官によって丁寧に書き留められていた。

このマハラジャはヤダヴィンドラ・シン（Yadavindra Singh, 1914-74, 在位1938-47）と考えられる。パティアラ藩王国もインド独立の際に吸収されて消滅した。

この地では「地元の人々について君に伝えるべきことは何もない、なぜなら誰もいないから。地元での友人についても聞かせられない、一人もいないから。僕自身のことや仕事の内容、居場所も伝えられない、機密だから。一体何を書けばよいのか」という状態が続く。「この年の終わりまでに戦争は終わるというローマ法王ピウス10世の予言を信じ」て過ごす日々だった。また「最後に医者らしいことをしたのは2年前で開戦以来ほとんど兵士の仕事をしており、医療的知識をすべて忘れてしまうのではないかと思うと軍での生活が不安になる」とも告白している。9月初めには「ホームシック」という単語が現れ「東洋の魅力は長くは続かないもので、すぐに人は故郷を焦がれるようになる。僕もどこへ行こうとも故郷を恋しく思うのだろう」と綴っている。9月半ば「この付近では緊張が少し和らいだが、一時的なものかもしれない」と記録されている。日中や夜間の行軍、負傷者搬送の訓練が繰り返される日々だったが9月13日は「おもしろい一日だった」。

空軍基地で医務官として過ごした。航空機が離着陸する時、事故に備えて救急車で待機した。パイロット全員に会ったが皆立派な若者たちだった。雲の上から僕らちっぽけな生き物を見下ろすのはすばらしい人生だろう・・・僕は早くも爆撃機や戦闘機の専門家になった。今日たくさんの航空機を見たから。人を殺すために使われさえしなければ飛行機とはなんとすばらしい発明だろう。

2日後にはクアンタンで初めてミサに出席し「最高にうれしかった」。教会は「フェリー移動を含む11マイル先」にあった。「礼拝堂は色とりどりの電飾や豆電球で装飾され、祭壇は美しい花々で飾られていた。明るい照明や色を使うのが土地の習慣」だ。フランスと地元出身の神父がおり、信徒は「半分は中国人、半分はタミル（インド）人」だった。マレー氏の目前ではこの地で働く「アイルランド人医師、医師である妻、亜麻色の髪をした彼らの美しい3人の幼い娘たち」がひざまずいていた。9月半ばに数度ミサが開かれ、空軍からも将兵が参加した。次回は12月21日と伝えられた。

9月末には「僕の手紙はだんだんつまらなくなってきている」がそれはこれまでの基地に比べて「ここでは戦略的に状況が全く違うので、日曜以外はまったくひどいゴム農園に毎日一日中閉じ込められている」ためだった。南シナ海に面しマレー半島中部にある「この場所は健康に悪く、多くの者が体調を崩している。僕はまだ健康であることを神に感謝する」とあり、「社会生活が存在しない」「この基地に来てから知り合った民間人はたった一人」で、それは教会で出会ったマクマホン（McMahon）医師だった。「兵士の装具を点検するために5時間使う」ような任務が続き「僕は医者なのにこんなことで大事な時間を無駄にしている」と感じ、「戦争が終わったらすぐに除隊して」故郷で開業したいと婚約者に伝えている。このような状況だったにもかかわらず「自分は基地で一番の幸せ者だ」「世界で一番幸せだ」のような記述が続く。婚約が成立したことも理由にあったのだろうが、日記ではこの感情は宗教的な感覚として説明されている。

僕は人生について少し奇妙な考えを持っていて、それは君以外にはこれまで誰にも話したことがない。僕には自分のまわりのすべての人とすべてのものに神を見ることが出来る才能がある。フェリー乗り場で暑さと湿気のなか蚊に刺されながら一日中働いているあの貧しい労働者たちも神がお創りになったと知っている。彼らは世間では卑しく取るに足らない存在だからこそ僕は彼らを愛する。彼らは僕の友人だから僕はいつでも微笑みかける。そして彼らは必ず僕に微笑みと敬礼を返してくれる。この地区全体で彼らと顔見知りの将校（司令官も含めて！）は僕だけだと言えるのが自慢だ。こういうことが僕を幸せにしてくれる。軍の一番偉い人の微笑みよりも一人の労働者から微笑みを受け取りたい。君はとんでもない夫を持つことになるね、労働者をつるんでいる奴なんだから！

10月16日の日記には再度日本の記述がある。この日は近衛内閣が総辞職した日だが、それを知っての記述かは不明だ。

戦争はだらだらと続きドイツはモスクワに近付いている。それでも僕は戦争が年末で終わると信じている。ピウス法王は僕らを決して失望させない。極東の状況も再

びお先真っ暗だ。でも日本は今度は好機を逸したように思う。シンガポールとマラヤの驚くべき強さに日本は気持ちをくじかれているだろう。

同じ頃の記述には入隊の理由と考えられる記述が再び現れる。

世界中の金銭をくれたとしても僕はアイルランド以外には住むつもりはない。生き延びるたびにアイリーン、君と、僕の宗教と僕の国への愛はますます強くなる。故郷では多くの人々が一体なぜ僕がこの戦争に行くのかまるで理解できなかった。このことで敵を作りさえしたかもしれない。でも僕はただ自分が正しいと思ったことをしただけだ。

これを読むとやはりアイルランドのカトリック教徒がイギリス軍に入隊することは単純でも簡単なことでもなかったことがわかる。入隊してすぐの頃、その理由を「父は全く理解できなかった」とあったが、それどころか敵を作るほどの行為であった。この部分を読むと、それでもなお入隊したのは故国アイルランドを守りたいというのが大きな理由だったと受け止めることができるだろう。

10月末にはイスラム教のラマダンの時期が終わり、「マレー人は皆イスラム教徒」であるこの町では「長い断食が終わって祝いの日を迎え誰もが幸せそうだった」。基地では祝いの宴が開かれた。

将校と兵士は別々の席に着いた。厳粛で仰々しい行事だったが僕が兵たちにウィンクをしたり変な顔をしたりしてその場を台無しにした。他の将校は兵士の方をまったく見ようとさえしなかった！イギリス軍のアイルランド人とオーストラリア人はイギリス人将校には欠かせない資質である冷淡さを忘れてしまう傾向にあるようだ。イギリス人将校はなぜだかユーモアのセンスをまったく持っていない。こうして昼食を食べすぎて眠たい気分であったところ、上官から海へ行くよう命令を受けた！海岸沿いの2か所で泳いで、隊が使うに適した場所を報告するように言われた。休暇用のキャンプ場を作る計画があるようで、適した場所を探しているらしい。

これから数日後「飛行場で『患者』を飛行機に乗せたり降ろしたりする訓練」をし、また同じ時期には「近い時期に偵察のため大型爆撃機に数時間搭乗することが将校の義務になると伝えられた」。ある将校は不眠に悩まされていた。この将校はインド人で精神分析医だった。

僕は彼に聞いてみた。なぜ僕は夜によく眠れてなぜこんなに幸せで満ち足りている

のかと。彼と同じ環境にいるのに。「ああマレー大尉、あなたは私たちとは違います。あなたはどこにいても幸せで満足できるでしょう。なぜならあなたはどんなことも乗り越えるようしつけられているし、そのうえあなたには信仰があります。」インド人の彼は自分には信仰がないと言い、僕がカトリックだと知っていた。僕は宗教について彼らと話したことはなかったのに。僕は彼らに説教をしたり自分の信仰を表に出したりは決してしない。

体調を崩す兵士もいたようだ。「マラヤでは多くの人が日に日に衰弱していくようだ…この国では健康は決定的に重要で、それを損なうようなことを僕は決してしない。日に10回は蚊に刺されるありがたいことにマラリア原虫を持っている蚊は少ない」と記されている。11月になっても訓練を繰り返す日々で「この地では何も起きない。君からの手紙だけが楽しみ」と綴っている。

戦争は延々と続くようだ。毎日拡大している。でも僕はまだピウス法王の予言を信じ、すぐに戦争は終わると思っている。戦争はずっと前に終わっていたら、フランス人の代わりにフランスにアイルランド人が5000万人いたならば。最後の一人になるまで戦うだろうし、故国への侵入者たちに対して今でもヨーロッパ中で戦っているだろう。戦いは僕らの血の中にある、そして祈りも。

イギリス人の高官や将校に対しては批判的で、在ペナンのイギリス総督代理が基地の視察に来た際のことは以下のように伝えている。

これは大変な名誉であるらしい。長身で太めな彼と握手をした。白いスーツを着ていて、つばの広いカウボーイハットが大きなふわふわの丸顔と赤ん坊のような肌を隠していた。批判的すぎるかな、アイリーン？でもこれがこの名誉ある紳士の正確な描写だ。マラヤにいるヨーロッパ人らしく彼は離婚している。しかし妻の父親と総督代理は同居している。

またある日インド兵と水泳に出かけた時には次のように記している。

もし僕が「本当の」イギリス人将校だったら遠くから兵たちを義務的に眺めて絶対に一緒に泳がないだろう。でも僕は人間だから彼らのような善良な男たちと交わらずにはいられない。彼らは立派な兵士でもある。

将校の中には「軍隊生活、この場所、この気候」のせいで「眠れない者、食べられない

い者、様々な不満を持つ者、気分が落ち込む者」がいたが「自分はこれらの何にも悩まされていなかった」。マレー氏の場合インド兵との関係を良好に保つことは常に重要事項だった。

僕は彼らの友人であることをとても誇りに思っている。イギリス人部隊ではなくインド人部隊と一緒にいることに多くの面で感謝している。インドの村々から出てきた彼らは誠実で寛容、善良で純真だ。彼らはとても信心深く毎朝毎晩熱心に祈る。そして彼らの宗教の教えを忠実に実践している。

11月末になるとクリスマス休暇が取れる見込みであることが記されているが、12月8日に日本軍の攻撃を受けることになるためこの休暇が実現することはなかった。後に捕虜となるマレー氏だが、それを予感させるような記述が11月26日の日記にある。

この戦争では僕は非戦闘員だ。ジュネーヴ条約の第21条で特権が定められていて国際赤十字の保護下にある。僕は戦闘行為をすることを許可されていないし、敵は僕を攻撃することを禁じられている。捕虜にはなり得るが敵は僕を将校として扱って給与も支払わなければならない！彼らができるのは僕を医者として好きなように使用することだけで他の仕事をさせることはできない。でも敵がこれらのことを文言通りに実行するかはわからない。その敵はマラヤまで迫ることはないだろう。

この2か月半後には日本軍の捕虜になったが、日本軍の捕虜収容施設ではジュネーヴ条約が「文言通りに」実行されることはなかった。これについては前年号に記した。11月30日以降の日記からは事態が緊迫していく様子がわかる。

この場所の状況はこれ以上悪くなりようがなく、僕は戦争にまもなく送り出されるかもしれない。本当にそうなくても心配しすぎてはいけないよ、アイリーン。過度の心配は僕ら両方に悪い影響を与えるだけだ。僕らができることは祈り、すべてを神に委ねることだ・・・僕は将来どんなことがあっても君がそれに立ち向かえる勇気を神が君にお与えになるよう祈る。この手紙が君への最後の手紙にならないようどんなに強く願い祈っていることか・・・神が僕を山中の基地から移動させてくださったことに君は感謝していると思う。前にいた基地は今の基地より現時点ではずっと危険になっている。

12月3日には「自動拳銃を携帯するよう命令を受けた」とあり「戦争は延々と続くように思えるけど、僕はすぐに終わると今でも楽観視していてピウス法王の予言もまだ信

じている」とある。5日「敵を欺くため基地内に草で覆った緑の場所を作り」、翌日は「理由を言うことは許されないがとにかく忙しい」日となった。「砦を守っているので短いものしか書けなかった」この日の日記は以下のように締めくくられた。

もしこれが僕から君への別れの手紙になるなら、ダーリン、君に言うておかなければならない。僕らが一緒に過ごしたこの数か月は僕の人生でもっとも輝かしく、もっとも幸せで、もっとも神聖だったと。

12月7日「今夜は職場の電話の横で寝る予定、なぜなら国全体が非常事態にあるため」とあり、以下の記述が続く。

この地が危機にあり、空軍の偵察によると大きな日本の船団がシャム湾に近付いていることを君も知っているかもしれない。これは機密ではなくラジオでも今日発表されていた。当然マラヤでは全員戦闘待機状態だ・・・僕はずっと制服を着ていて今夜はこのまま寝なければならない！小さな自動拳銃を昼夜身に着けている、絶対に使うつもりはないが。

太平洋戦争開戦の日となる12月8日、日本軍はマレー半島北部コタバル (Kota Bharu) に上陸、10日にはクアンタン沖でイギリス海軍の主力艦2隻を撃沈、28日にイポーを占拠した。翌年1月11日にはクアラルンプールを制圧し2月8日にはシンガポール入り、15日にはここも制圧してイギリス軍は降伏した¹⁰。この間もマレー氏は日記を書き続けていた。12月8日は以下のように記録されている。カトリック教会の暦ではこの日は聖母マリアの無原罪懐胎を祝う日だ。

今朝前線の応急救護所から「宣戦が布告された、海軍に爆撃、敵は海岸から上陸」との連絡を受けた。自分の目をほとんど信じるができなかった。聖母マリアの祝祭日に戦争が始まるとは冒涇のように思えた。僕のいる救護所本部はひどい一日だった。僕は空軍の軍曹一人に自分の血を輸血したが、彼のような人物にそうすることができて誇りに思う。彼は日本の戦闘機を海に撃ち落とし無事に戻ってきた。他の負傷者は軽傷だった・・・今日僕はとてもうれしかった。ようやく何か価値のあることができたから。

9日に日記は以下のように続く。

¹⁰ 詳しくは『マレー進攻作戦 (戦史叢書1)』(防衛庁、1966)；『比島・マレー方面海軍進攻作戦 (戦史叢書24)』(防衛庁、1969) 他

今日は極東での戦争の二日目。今朝何時間も日本の爆撃機に爆弾と機関銃で攻撃を受けた。僕にとっては初めての空襲の経験だったが不思議なことにまったく怖くなかった。他の負傷者と共に空軍の軍曹を担架に乗せて塹壕まで運んだ。そこで僕らは長い間あの大型爆撃機を眺めていた。最初は1000フィート上空を隊列で飛んでいたが、その後木の少し上まで降下して僕らの病院を機銃掃射した・・・爆撃と機銃掃射の後、この場所全体では軽傷者が一人出たのみだった。僕の友人の 아일랜드人医師もやって来て、彼は手術室で大いに活躍した。彼はとても陽気で患者の扱いがうまい。日本軍はまだこの地域には上陸しておらず、ほとんどがコタバル地区にいる。これは今日ラジオでも発表されていた。我々は飛行場をまだ守っていてインド人兵士たちもとてもよく戦っている。眠れるときに少し寝ておこう。

10日、トラックに乗り数時間基地の外へ出た時の様子が記録されている。

避難民たちが道をぞろぞろと、行く当てもないのに、歩いているのを見るのは悲しかった。中国人、タミル人、マレー人。女性たちは赤ん坊を胸にぎゅっと抱きしめ、もう片方の手で包みを抱え、青ざめて怯えた顔は悲しげだった（特に中国人は）・・・兵士たちは空襲に慣れてもはや何とも思わなくなった。今日も空襲があったが被害も負傷者も出なかった。例の軍曹は今日移送された。彼がいなくなるのは少し残念だったが、基地の病院にいたほうがずっといい。

11日には「停電のため暗闇で手紙を書いて」いたが、「今日ついに医者の仕事をし」「何人かの痛みを取り除いたり喜びを与えたりした」。12日になると「あまり仕事もなく一日中リラックスした」。この日書かれた内容は非常に鋭い指摘だ。

極東の戦争について今日は大してニュースがない。日本は本格的な爆撃で開戦したが、これからは少し動きが鈍るだろう。そしてそのうちアメリカ軍に攻撃されてこの地域での戦争も終わるだろう。日本は短期間小さな成功を収めるだろうが、イギリス、アメリカ、中国、東インドが協力すれば日本に勝ち目はない。

13日も空襲があった。

爆撃機が何機か来て爆弾を落としていった。被害はなし。気の毒な日本人は爆撃がひどく下手だ。この国では正確な爆撃はほとんど不可能ではあるが。塹壕に座って頭上の爆撃機を見上げていた時、まったく怖くなくとても冷静だった。新たな勇気が湧き幸せでもあった。空襲中に幸せっておかしいかな？

この後同じような日が続き、18日にも「何度か下手な空襲があった以外は何もない」と書かれている。翌日は「とてもうれしい日」となった。フランス人神父がミサを開いてくれることとなり、「6人のカトリック教徒を集めてトラックに乗せ、8マイル先の小さな村で落ち合った」。中国人学校の校舎で開かれたそのミサにはアイルランド人医師と中国人信徒二人もいた。「この小柄な神父はただ自分の聖なる仕事を続けていた。小さな車に乗って危険な道を一人で移動しながら。彼は警察や軍隊に呼び止められ尋問を受けても恐れを見せず、何があっても逃げない」。

20日にも「日本の爆撃機がやって来て僕のまわりに爆弾を落としていった」が「地面に穴が開いただけで被害がなく」「こういう国では爆撃は脅威ではない、爆弾が被害をもたらすのは都市部だけだ」と記している。「ペナン島が陥落したと聞いた」21日、日本人捕虜の手当てをしている。

彼を他の負傷者とまったく同じに扱った、お茶を出したりね！彼は重傷を負っていたが満足したようだった。戦争中の医者は感傷的になるべきではないかもしれないが、この若者にももう二度と会うことのない愛する人が故郷にいるのだろうかと考えた。

22日には「日本軍はクアラルンプールに接近」し、「僕の愛するイポーに近付いて」いた。23日「北側から日本軍が迫ってきている」が日本はこの時点までに「かなりの死傷者を出し、爆撃機9機を失った」と記録されている。25日のクリスマスには「すべての個人的な電報の送信は不可能」となり「唯一クリスマスらしかったことは宿舎で昼食に食べたケーキとレモネード」だった。翌26日「日本軍は僕が今いる場所にとっても近付いているようだ」が「僕は何も恐れていない」とある。28日「日本軍はマラヤや北部ではゆっくりと移動している。イポーからは女性と子供は避難したが敵はまだあの美しい町に到達していない」。29日には「ラジオでイポーが日本軍の手に落ちたと聞いた。でも僕のいる場所では爆撃や機銃掃射があったものの大した被害はなかった。信じられないようなことだが空襲で一人の負傷者も出ず損害は何もなかった」。しかし31日には以下のような内容となる。

昨夜は一睡もしなかった。昨日は夜通し猛烈なペースで働いた、そして今日も。僕はこの戦争は少しも怖くない、爆撃や機銃掃射も。最近戦争の恐ろしさを目の当たりにした。自分に強さと勇気があることを神に感謝する。君の愛はいつも僕の支えだ。僕は最後にいた基地からかなり離れた場所においてすべての快適さは失われた。でも僕はこの状況を楽しんでいる・・・どうか心配しないで、何も心配する理由はないから。僕の生涯でもっとも幸せな一年をありがとう。

日本軍はこの日クアンタンに到達、1月3日には飛行場も制圧する。元日「沼のようなジャングルの泥の中でひざまずいて」新年の祈りを捧げた。翌日「2日間眠れなかったがようやく少し睡眠がとれた・・・紅茶、ビスケット、コーンビーフで生きているが戦いの最中に食べ物のことはあまり考えない」とある。この日は「立ったままジャングルの中の大きな石の上で書いて」いた。「救急隊の本体とは離れインド人看護師たちと少人数で」行動し「前線の後ろを転々としている」と記録されている。5日には「日本軍は・・・数の力で前進してくる。昨日銃剣で軽傷を負った将校を手当てしたが彼は倒れる前に6人の日本人を撃った。このような国での戦争は忍耐力の勝負だ」とあり、翌日「少し息がつけたがこれも長くは続かないだろう」とある。正確な場所は記録されていないがこの間次々と場所を移動しており、14日には次のような記述がある。

僕は美しい庭に座っていて遥か地平線上では丘の向こうで日が沈むのが見える。僕の隣にはライムの木があり何百もの実が収穫されずに残っている・・・約1マイル先には労働者の居住区が見える。清潔で手入れが行き届いている。屋外には公園、牛やヤギ、彼らにとっては平和で満ち足りた王国だ。間もなく彼らはこれらすべてを失うかもしれない。そのお返しに彼らは何を得るだろう。なぜだかいつも戦争は純粋な人々を一番傷付ける。

マレー氏は1月16日に別の移動救急隊の司令官に任命され、それまで所属していた救急隊を離れることとなる。18日には司令官としてシンガポールに赴いたが、この時の「唯一の心配事は」「とても愛情を持つようになった」インド人兵士たちと「どうやって別れるか」だった。マレー氏が指揮したインド兵たちがこの後どうなったのか日記には記録がない¹¹。

5. 最後に

2月15日のシンガポール陥落によってマレー氏は戦争捕虜となったが、この際インド人兵士も数多く捕虜になっている。イギリス軍将兵は白人とそれ以外の人種で分けられ、マレー氏を含む白人捕虜はチャンギにある収容所に送られた。一方で約6万5千人いたとされるインド兵捕虜は別の場所に集められる。これは前年9月に日本軍がF機関と呼ばれる組織を作って英印軍に所属するインド兵に対して懐柔工作を始めていたことと関係している。インド人が東南アジアで組織した反英団体と協力し12月31日にはタイピン（Taiping、現マレーシア）で投降したインド兵らから成るインド国民軍（Indian National Army）が結成されていた。シンガポール陥落2日後の2月17日にはシンガポールのファラ公園にインド兵捕虜が集められ、彼らにはインド国民軍への入隊が促された。

¹¹ 前掲『マレー進攻作戦』付表によればクアンタンのインド第9師団は「潰滅」。

この時捕虜のうち約2万5千人が国民軍に入隊した。国民軍は大戦後のインド独立に役割を果たす。この経緯については日本に亡命していた「中村屋のボース」ラス・ビハリ・ボース (Rash Behari Bose, 1886-1945) の知名度もあってよく知られている。しかしこの時国民軍に入らなかった捕虜が労務者としてボルネオなどに送られ過酷な体験をしたこと、また日本軍に協力してインパール作戦などで国民軍兵士からも多数の犠牲者を出したことは見過ごされがちだ¹²。日本軍の捕虜政策についての研究も、ともすれば主に英米軍の白人兵士の研究に関心が集中する傾向にあるように思われる。

イギリス軍のシンガポールでの敗戦は、アメリカ独立以来の屈辱などと評される。日本軍が100日を予定していたマレー半島の制圧は70日で完了した。この敗北は戦後のアジア諸国の独立にもつながったとされ、分析は数多くなされている¹³。敗因の一つとしてよくあげられるのが、様々な民族で構成されていたイギリス軍の士気の低さだが、この点についてはマレー氏の記録からもその一端を読み取ることができるだろうか。インド駐留のイギリス軍やその関係者の生活ぶり、またマレー氏が率いていた部隊の人種構成などはその傍証となるかもしれない。

マレー氏の日記を読むと、アイルランド人としてイギリス軍に入隊したことは裏切り行為でもイギリスびいきの行為でもなかったことがわかる。むしろ祖国アイルランドを守るための行動だったとうなずけるものだ。アイルランドはこの100年程の間イギリスからの独立、南北分轄、北アイルランド紛争と困難な状況を経験したため2度の世界大戦と自国とのかかわりを冷静に分析することが難しかった。大戦から時を経た今、個人の記録なども徐々に公開されるようになった。今後はこのような資料から戦争にかかわったアイルランドの人々についてより多角的な研究が進むことを期待したい。

(本学非常勤講師)

¹² Stephen P. Cohen, 'Subhas Chandra Bose and the Indian National Army', *Pacific Affairs*, Vol. 36, No. 4 (Winter 1963-4), pp.411-29; Hugh Toye, 'The First Indian National Army, 1941-42', *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol.15, No.2 (September 1984), pp.365-81; 藤原岩市『F機関インド独立に賭けた大本営参謀の記録』(振学出版、1985); 丸山静雄『インド国民軍—もう一つの太平洋戦争』(岩波新書、1985); 国塚一乗『インパールを越えて F機関とチャンドラ・ボースの夢』(講談社、1995); 林博史「インド人の戦争体験—インド国民軍と労務隊」『関東学院大学経済学部総合学術論叢』42号(2007); 中島岳志『中村屋のボース—インド独立運動と近代日本のアジア主義』(白水社、2005); 長崎暢子他編『資料集インド国民軍関係者証言』『資料集インド国民軍関係者聞き書き』(研文出版、2008); ラス・ビハリ・ボース他『アジアのめざめ: ラス・ビハリ・ボース伝』(書肆心水、2011); 樋口哲子『父ボース: 追憶のなかのアジアと日本』(白水社、2012)

¹³ John Ferris, 'Worthy of Some Better Enemy? The British Estimate of the Imperial Japanese Army and the Fall of Singapore, 1919-1941', *Canadian Journal of History* XXVIII (August 1993), pp. 223-56; カール・ブリッジ「指揮の危機—ベネット少将と1941・42年マレー作戦における英国軍の有効性—」『戦争史研究国際フォーラム報告書』第1回(2003); ポール・H・クラトスカ『日本占領下のマラヤ1941-1945』(行人社、2005); Thomas S. Wilkins, 'Anatomy of a Military Disaster: The Fall of "Fortress Singapore" 1942', *The Journal of Military History*, Vol.73, No.1 (January 2009), pp.221-30; 山本文史『日英開戦への道: イギリスのシンガポール戦略と日本の南進策の真実』(中央公論、2016)